



朝のこない夜はない

水みずのように柔軟にゆうなんな心こころで


堪忍かんにんしましよう

副山首 鈴木正修

「上善如水」(上善は水の如し)という言葉があります。近年はお酒の銘柄になつたこともあり、広く知られるようになりました。出典は『老子』です。老子は「最も理想の生き方は水のようなものだ」と言い、特に水の二つの性質が学ぶべき「道」に近いと言っています。

第一は、柔軟性です。

水は、丸い器に入れると丸い形になり、四角な器に入れると四角な形になります。相手に逆らわず、相手の出方に応じていかようにもこちらの体勢を変えていく、そういう柔軟性を持っています。



第二は、謙虚さです。

水がないと地球上の生物は生存できません。そういう大きい働きをしておりながら、自分はと言うと、低い所、低い所へと流れてゆきます。低い所というのは誰でも嫌がる所ですが、水はあえて人の嫌がる低い所に身を置こうとする謙虚さを持つています。


柔軟性と謙虚さ、この二つは世を渡る上での要諦であると私は思います。

江戸の心学道話に次のような話があります。

『京都に巨万の富を貯えた呉服屋がありました。人がうらやむ富裕ぶりでしたが、夫婦の間には子どもがなく、年をとって心細くなったので、親類縁者のなかから養子を迎えることにしました。しかし、老夫婦があまりにも偏屈でしたので、ひとりも辛抱できる者がいません。

二十八人目に来た養子も、二、三ヶ月は辛抱していましたが、今日こそは実家へ帰ろうと思っていたとき、新しい障子をはめ込むために養父が大工を連れてきました。

見るともなしに見ていると、大工は障子の上部を削っては鴨居にはめてみたり、また下部を削っては敷居にはめてみたりしたあと、柱の歪みに合わせてピタリと障子をはめてしまいました。そして障子を左右に引くと、突っかえることなく音も静かに動きます。



これを見ていた養子は、なるほど、これだ」と膝をうって、こう考えました。

私が障子だとしたら、養父母は敷居や鴨居、あるいは歪んだ柱ではないだろうか。それに合わないからといって養父母の気質ややり方に不満を持ち、自分の意に合うようにさせたいと思うのは敷居や鴨居、柱を削ろうとすることと同じだ。養子は心機一転、それから不平不満もなく、養父母と和合することができたのです」

これは心学道話ですから創作話ですが、私たちに柔軟性と謙虚さの大切さを教えています。

御開山上人もご法話の中で次のように言っておられます。

『私は師匠の杉山先生からこの教えの理を聞きました。私の父は、自分の子どもの意見を用いることも、他人の意見を用いることも好まない性質で、自分の思った通りにしか動かない人でした。私は、どうも意見が合いませんでした。しかし杉山先生は、

法華経の教えを行なうものが親の心に随うことが出来ぬようではならぬ」とおっしゃったのです。

私は三日ぐらい考え、決心して、両親の言うことは二つ返事で聞くことにしました。

一年、二年と続く内について、



朝のこない夜はない (216)

「お前は日本中で私の意見を一番よく聞いてくれる者だ」と申しました。そうして、

「お前はよい先生から教えを受けた。私は法華経を常に読み、誦んじ、誦読して、父親に読んで聞かせたものだ。お経を読むことはお前に負けないと思つたが、法華経は毎日の暮らしに日々応用する教えであることを知らなかった。本當に有り難いことだ」

と申して、よく私の話す法華経の話を聞いてくれました。

世の中で「意見が合わぬ」と困っている人がいたとしても、こちらが相手に合わせるようにしたならば必ず相手も自分を信用し、自分の意見を聞いてくれる人になる、という確信を持ちました。これが「柔伏」ということであり、堪忍の忍えを説く者にはことに大切なことと思ひます」

柔伏の柔は柔軟性であり謙虚ということです。こういう心でする堪忍が本當の堪忍です。これが出来る人が真に教えを弘められる人だと、御開山上人は言っておられるのだと思ひます。